

# アジアを 読む

10

## マハティール首相退任 少なくなる世界を語れるアジアの首相

80〜90年代にかけて、香港、シンガポール、マレーシアなどで駐在記者をしていた。その間に接した政治家などの発言が今でも耳に残っている。

「私が問題にしているのはジョージン・ロス氏のことだと今日確信した」。最も印象に残っている発言である。声の主はマレーシアのマハティール首相。97年7月に開かれた東南アジア諸国連合(ASEAN)の一連の会議の最中に言い放った。タイで発生した通貨危機の引き金を引いたのは、ヘッジ・ファンドを運営する米著名投資家であるとして名指しで非難した。その表情はまさに鬼のような迫力だった。

面下で繰り広げられていた98年7月の記者会見である。隣にアンワル副首相を従えて、「アンワル君は文才があり、最近では詩までものになっているようだ。それに比べ医者出身の私は患者の悪化した手足をちよんぎることぐらいいしかできない」。その2カ月後に、同首相はアンワル氏を解任した。

このマハティール氏が10月末で首相を退任した。個性的な指導者だった。この首相の持ち味は、言葉だった。率直に自分の言葉でズバリと核心をつく発言をし、周囲を驚かせると同時に、納得もさせたと納得もさせた。

アジア通貨危機最中に、いつ退任をするのか」との記者のいじわるな質問に対し、丁寧に職にとどまる理由を説明し

たことも記憶に残る。最近では、ミャンマー軍事政権によるアウン・サン・スーチー氏の拘束問題に関連し、「ミャンマーのASEAN除名も検討する」との趣旨の発言をし、仲良しクラブのASEANを揺るがせた。

その強権的な政権運営手法には賛否両論があった。22年間の首相在任中に後継者と目されてきた副首相2人を事実上政界から追放、治安維持法を発動して反政府運動などを抑え込んだ。また途上国の実情を無視するかのような欧米による価値観の押し付けに激しく反発。第3世界のリーダー役も果たした。

マハティール氏は、原則の人」とよく呼ばれる。同氏の政治家としての「原則」とは、「マレー人の地位向上」と「マレーシアの工業化」にほかならない。労働倫理という原則をマレーシア社会に根づかせるために日本や韓国に習え、ルック・イースト政策を提唱、公務員の規律向上を進めるために自ら率先して胸に名札を着用したことは良く知られる。

製造業の振興を促すために、東南アジアでは早期に外資導入に踏み切り、マハティール・ベビトといわれる国民車「プロトン」を発足させた。シンガポールの国土に匹敵する広大な情報産業基地「マルチ・メディア・スパー・コリドー」(回廊)をスタートさせるなど、時代に合わせた

壮大な産業政策を推進してきた。

しかし、一方では、矛盾の人」とも形容された。例えばアジア通貨危機最中に激しく米国の金融資本批判を繰り返しながらも、マレーシアの財政顧問として米投資銀行を指名し、周囲をあせんとさせた。経済の効率化と民族資本家の育成を掲げて公営事業の民営化を進める課程で、結果として政官と経済界の関係が不明朗なポリテュカリティ(二重性)と呼ばれる特異な経済体質を強めてしまった。これが後年、国内外から、クロウニズム(取り巻き主義)との批判を招いた。この批判に対して、マハティール首相が(私の)政策の恩恵を受けるマレーシア全国民すべてが私のクロウニだと堂々と反論したことも思い出す。

通貨危機をはさむ2年間、マレーシアでマハティール氏の言動を注視してきたが、批判もあったものの、アジアの首脳では群を抜く存在感だった。目標とそれのための具体的な政策を提示して、国民に理解と努力を促す政治手法・指導力には説得力があった。後を継いだアブドゥル・バキ首相はトップダウン方式から集団指導体制への転取りを迫られるだろう。

マハティール首相の退任により、自分の言葉で政治哲学や世界を語るアジアの首脳がさらに少なくなつた。

(日経香港社 奥村幸広)